

〔論文〕

対人援助職としての防災教育の視点

—被災地から学ぶリスクマネジメントの初期プログラム—

長 橋 幸 恵

はじめに

災害が日本で起こった際に、被災地に向いて支援をしたいと考えるボランティアの意識は、今日の日本においては非常に高くなっているといわれている。しかし、それを行動に移すための具体的な方法やプログラムが教育現場では見えてこない。

2011（平成23）年3月11日の東日本大震災のときの衝撃的な震災が発生し、福島第一原子力発電所事故により大きな被害が日本で起こったことを受け、誰もが人事ではない、いつでも大規模震災が起こるかわからないと考える必要性が出て来たがその後、実際に熊本地震でも同様の大きな被害が発生している。

大阪城南女子短期大学（以下、「本学」という）には、人間福祉学科に介護福祉士、総合保育学科に保育士・幼稚園教諭の対人援助職を育成する学科がある。その多くは対人援助職を目指し、将来的に人命を守ることでできる専門職へと教育したいと考える。そこで、喫緊の課題である防災教育の必要性を取り上げ、防災の視点を日頃から考える防災教育を考えたい。今後、対人援助職に就く担い手には、地域全体を取り込んだリスクマネジメントのプログラム化やボランティア教育の視点につながるのではないかと考えた。もし、災害が起こった際には、災害弱者になる人たちの支援を率先する立場になる可能性がある。そのときにどのようなことが起こるのか、どうしたらいいのかを考えておく必要があり、リスクマネジメントの視点を持った学生を育てる教育プログラムを考えていくことが重要であるが、しかし、現在のカリキュラム内容に防災教育に関する中身については、非常に少ない印象がある。

そこで、東日本大震災から5年が経過し、福島第一原子力発電所事故の問題や過疎地の復興が遅れている被災地を実際に訪れ、福祉施設、幼稚園、復興まちづくり交流館等、地域の人々から、当時の話や現在の状況について声をすくいあげる被災地研修を実施し、それを地域や周囲の人へ伝えていく防災教育を考えたい。

第1章では、初期プログラム立案と平成28年度大阪市ボランティア活動振興基金の助成事業の申請について、第2章では、実施のための事前準備として、被災地研修先の選択と一年間のプログラムの組み立て、第3章では、被災地研修の実施内容と、一年間でどのように地域に広めるのか、第4章では、今後の課題、問題点や反省について、2016（平成28）年4月から2017（平成29）年3月の一年間の初期プログラムについて論じたい。なお、本稿では、初期プログラムと被災地研修プロ

グラムの2つを使用するが、特にプログラムと使用する場合は、一年間の初期プログラムを指すもので、被災地研修プログラムとある場合は、おおむね現在進行中の内容を含め、2018（平成30）年度までの実施する内容を意味する。

1章 初期プログラム立案と助成金申請

自然災害の多い日本では、いつどこで災害に見舞われるかわからない。日本各地での地震や津波、豪雨による被害が起こっている現状にあり、今から起こるとされている南海トラフ地震に備えておく必要がある。大阪は、幸いなかなか災害に遭いにくい。その点においては防災意識に欠けるように感じる。

現在の厚生労働省のホームページによると、「介護福祉士養成のカリキュラム等について介護の基本（180時間）の中の⑨介護における安全確保とリスクマネジメント」¹⁾に防災対策について含まれているが、十分なものではない。

筆者自身が、高齢者施設で働いていたときに防災の視点があったかということ、あまり考えずに働いていた。当時、夜勤をしていた際に、大阪では少し大きめの震度の揺れを感じた経験があった。エレベーターが止まったものの、利用者や建物への被害はなく、無事に済んでよかったというだけで、終わってしまった。その当時を振り返れば、高齢者施設で働き始めの介護福祉士で防災のことを考えながら働いておらず、施設に地震の際のマニュアルの有無さえも知らない状況で、地震があったあとに、「エレベーターって地震のときは止まるのですね」というだけで、今後の防災対策等を職員間で話をすることもなかった。いつどこで起こるかわからない災害への備えるという視点は、今後の対人援助職には重要である。

そこで、2017（平成29）年5月16日の実習指導者会にて、本学の实習先でお世話になっている施設の方々に防災に取り組まれていること、備えていること、備品についてのアンケートを行なった。以下は、質問「施設にて防災に取り組まれていること、備えていること、備品についてお教えください（自由記述）」に対する主な回答である。

- ・年に一回の訓練のみです。備品についても検討中です。
- ・水・保存食（どのような食事形態の方でも食べられるもの）を準備し、保存場所などがわかりやすく貼り出ししています。オムツ・パット類など多めに在庫をおいています。
- ・月に一回の発電機使用、安否確認メール訓練実施中。
- ・地域の区と特定避難所の提携をしている。
- ・利用者に対して地震の避難訓練月に一回、火災訓練6か月に1回、備蓄食品3日分から7日分の保管へ変更している。
- ・法人職員 有事に状況（生存や出勤等）を確認するシステム導入した。
- ・地域の災害時の受け入れをする。

- ・防災訓練をどこまでリアルに行なえるか。
- ・マニュアルの整備をしている。
- ・デイクアより白板を取り出し現場本部が利用すること、シート等にて避難のための応急タンカ等の練習をしている。
- ・消防署・施設協同の火災訓練を実施している。
- ・水が使用できないときのトイレの使用法・地域の防災訓練の参加している。
- ・防災グッズの確保（懐中電灯、ラジオ等）をしている。
- ・小学校等へ協力する。

上記のアンケート結果から、施設でも防災への取り組みについては、日々改善され、整備されている現状にあるが、今なお喫緊の課題であると考えられる。施設間でも防災の取り組み状況は様々で、どれだけ防災に視点を置いているかによって、取り組み状況が違うという現状にあるが、今後、より多くの施設でも防災への意識が必要となってきている。

このプログラムの立案・申請は、被災地へ実際に行き、ボランティア活動をしたという思いから始まった。しかし、実際に被災地に行きボランティアをしたいという学生はいるが、経済的に難しいというのが現状で、なかなか足を運べていなかった。そこで、大阪市ボランティア・市民活動センター（社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会）の平成28年度大阪市ボランティア活動振興基金の助成事業一覧の「生徒・学生の福祉ボランティア活動の基盤整備事業」に申請することにした。その事業は「サービス・ラーニング（SL）学校と地域貢献活動を通して、地域福祉の実践スキルを身につける教育プログラムを取り入れるなどの学外活動支援に使用できる」²⁾であった。30万円以内の助成を受けることができたため、この助成金への申請を決定した。

テーマとしては、「被災地から学ぶ地域福祉の実践と教育—対人援助を学ぶ保育・福祉の学生による防災連携へのアプローチ—」とした。

実際に被災地を訪れることで、触れて、感じ、伝えることで成長できる研修を実施し、それを大阪の地で活かし、災害弱者の方々を助けるのかを考えることのできる学生の防災教育を目的とした。本学の総合保育学科・人間福祉学科の一回生の中から、それぞれの専門的な視点で、災害時の現状や防災の方法を現地の被災された方々や仙台白百合女子大学佐々木ゼミ（佐々木貴弘先生）の学生との交流を持ち、当時の体験談や防災について取材する被災地研修を行ない、研修の成果を地域の人々や保育所、幼稚園、福祉施設等に伝えていく役割を担う学生防災リーダーを育成するという内容とした。

2章 初期プログラムの事前準備

まず初めに、年間スケジュールの計画を作成した。ただ単に、被災地を見学し、福祉施設や幼稚園等を訪れ、視察するだけでなく、その内容を伝えていく役割も担うことを念頭に、研修後の発表の場所選びも考え、一年間の計画を立てた。

年間スケジュール

月	日	実施計画
4月	12日	生涯学習センター・COC委員会による第1回目の会議で、本プログラムの内容と年間計画が承認を受ける。
5月	24日 30日	第2回目の会議を経て、学生防災リーダーの6名の募集、選考基準を共有し、募集活動をする。 応募者へのプログラム内容のオリエンテーションを行なう。
6月	7日 上旬	学生防災リーダー決定する。 (生涯学習センター・COC委員会での選考した6名決定する) 保育学生によるボランティア内容の検討。 介護学生によるボランティア内容の検討。
7月	上旬	先方の仙台白百合女子大学、佐々木ゼミ(佐々木貴弘先生)との研修内容の最終の打ち合わせを開催する。 石巻での市立大川小学校や近隣の保育園および介護施設を候補にあげる。
8月	29日～31日	東北ボランティア研修(2泊3日) 仙台白百合女子大学の佐々木ゼミ(佐々木貴弘先生)の学生間交流と施設視察。
9月	下旬	東北研修を踏まえて3日間の活動内容を再生し記録化する。交流の具体的議事録と取材内容の明文化、および撮影写真やビデオ等の編集再生作業を含む。
10月	下旬	後期開講を踏まえ、9月に再生記録化した資料に、東住吉区のコミュニティラウンジを用いたセミナーの開催をする。対象は、広く関心のある区民とし、年代や性別は問わないものとする。 子育て世代を対象に、本学のサテライト機能を持つ駒川商店街「コマクル」にて学生3名による発表を行なう。
11月	下旬	湯里小学校の高学年を対象とした学生による地域福祉セミナーの開催。
12月	下旬	平野区、住吉区近隣2区に公開する。一般市民向けのセミナーの開催。 東住吉区民ホールでのセミナーの開催。施設への研修報告(隆生福祉会等)。
1月	15日	地域福祉セミナー「ハッピー・サンデー」(クレオ大阪中央)でのセミナー開催。
2月	下旬	東住吉区協働のコミュニティ・ラウンジを用いたセミナーの開催。 本事業の第1回目の総括を含む。
3月	中旬	FD研修として本事業の最終総括。 次年度の地域福祉活動の立案と計画。

2016（平成28）年7月29日、平成28年度大阪市ボランティア活動振興基金の助成金230,166円の交付決定が通知され、実際に宮城県の石巻の被災地研修に行く資金を得ることができた。今回の通知には、「申請の経費がほぼ旅費ですが、この助成事業は市内の活動を支援するものなので、大阪に持ち帰った後、地域での展開と成果を報告時に求めます」という特記事項があった。そのため、大阪での活用を考えた防災の視点を持ち帰るように、準備に取り掛かった。

まずは、5月に学生防災リーダーとなる学生を選出することから始めた。初年度であるため、1回生が2回生に伝えていくようにプログラム化したいので、入学したばかりの1回生より選出した。当初は、総合保育学科、人間福祉学科、現代生活学科の各学科2名の合計6名を選出する予定であったが、予算の都合上、6月の時点で、専門の総合保育学科2名、人間福祉学科2名を募集しその選出を行なった。なぜ、学生防災リーダーになりたいのかを原稿用紙に記入し提出してもらった。以下に題名「学生防災リーダーとして取り組めること」に対する主な内容である。

- ・正直なところ現状がぜんぜんわかっていなく、調べてびっくりした。最近報道されることが少なくなり、震災から5年が経ち、すべての日常が取り戻すことができていないわけではない。自分の目で見て、目に焼き付けたい。
- ・自分がいざ震災にあったら、どこに逃げるのか、家族とも相談していませんでした。とりあえず、机の下に隠れるということしか知りませんでした。被災された人がどのように逃げたのか聞くことができたらと思います。
- ・将来、保育士や幼稚園の先生など子どもに関わる仕事に就きたいと思っています。緊急時の子どもの誘導の仕方、障がいを持っている園児への配慮など、自分のきになることは、細かく聞きたい。
- ・テレビなどでは伝わらないことがあると思うので、被災された方から心の傷、悲しみ、そして今のようなことを思っているのかを聞き、命の大切さ、尊さをあらためて伝えたい。

原稿用紙に記入した上記の熱意を確認し、その後応募者の面接をし、学生防災リーダーの決定を行なった。7月には、宮城県仙台市石巻方面の施設および幼稚園の研修先は、仙台白百合女子大学の佐々木貴弘先生に協力していただき、児童養護施設、幼稚園および高齢者施設の研修先を打ち合わせて決定した。仙台白百合女子大学の学生との交流も研修内容のひとつとした。宮城県の研修先とし、どのような場所を設定する、研修先とコンタクトを取り研修プログラムの説明、これらの初期プログラムへの理解していただくのには、現地に在住し、地域のことに詳しい佐々木貴弘先生のお力添えいただいた。次の4か所の施設を研修先として選択していただき、研修に行けることとなった。

①社会福祉法人ロザリオ聖母会児童養護施設 仙台天使園、被災した際、自分自身の施設も大変であるときに福島第一原子力発電所の事故により外で遊ぶことを制約されている子どもたちが外で遊べることのできる環境をされている取り組みを実施されていたこと、仙台白百合女子大学で施設見学や卒業生がいる。

②社会福祉法人旭壽会 特別養護老人ホーム雄心苑、宮城県石巻市の雄勝町の高台に位置する

③石巻市役所復興まちづくり情報交流館・雄勝館は、沿岸部に位置し、津波の被害が大きい場所であった。

④石輝学園 矢本はなぶさ幼稚園は、卒業生も働いていることと、津波で園庭にたくさんの漂流物が流れてきた園である。

本学の学生防災リーダーの保護者についても、まだ、余震も続く場所でもあるため、理解を得るため手紙で、研修内容、場所、保険に入っていることをお伝えした。

被災地研修での学びを報告し、展開と成果を発表するための場所の選定には、大阪城南女子短期大学は、大阪市内に多くの実習先を持っており、いわゆる地域コミュニティの拠点の中心的な役割をはたしている状況下であり、各方面からの協力体制を築き上げることが可能である。また、大阪市東住吉区とは長年の協働事業を実施しており、2015（平成27）年には、本学が、東住吉区と地域包括連携協定を結ぶなど、地域活動の拠点ともなっている。また、本学のサテライト「コマクル」を駒川商店街に設置し、子育て支援を中心とした地域交流の拠点として公開している。なお、本学の位置する湯里地域の小学校（湯里小学校）や町内会との交流もあるので、2016（平成28）年10月から3月の期間で月に一か所のセミナーを開催し、学生による発表をすることとした。また、本学で作成しているミニコミ誌「大阪ほっとコミ」への被災地研修の内容を掲載し、大阪や地域の人たちに広める展開を考えておくこととした。

3章 1年目（平成28年度）の実施報告

被災地研修プログラムを実施する際に、学生防災リーダーの4名には、学校で代表として行くということで、質問や記録写真の撮影、現地の方々の言葉を記録して、大阪の地に広める目的の内容を確認してから実施することとした。研修先の福祉施設、幼稚園等はできるだけ長時間滞在し、ゆっくりと当時のことを伝えていきたいとの要望があったことで、深く理解する時間を持つことができた。

【被災地研修プログラム内容】

研修日時：平成28年8月29日から31日 2泊3日

場 所：宮城県仙台市、石巻市方面とした。

本学学生：総合保育学科2名、人間福祉学科2名 本学教員2名（各学科）

現地で仙台白百合女子大学の佐々木貴弘先生とゼミ学生2名と合流する。

1日目（8月29日）

9：40伊丹空港出発→10：55仙台空港到着→移動・昼食→13：00社会福祉法人ロザリオ聖母会児童養護施設 仙台天使園（仙台市太白区茂庭台4-1-30）視察ならびに園長講話→17：00石巻プラザホテル宿泊（仙台白百合女子大学の2名とともに）

仙台駅にて、仙台白百合女子大学の佐々木貴弘先生とゼミ学生2名と合流し、社会福祉法人ロザリオ聖母会児童養護施設 仙台天使園へ向かう。ここでは佐野督郎園長の講和の内容の一部は以下

のとおりである。

- ・震災後に福島第一原子力発電所の事故により、外で遊ぶことを制約されている子どもたちが多かった。天使園が計画した、外で遊べなかった福島の子もたちを呼び遊んでもらう環境をつくる取り組みについて教えていただいた。何をするにも、リスクを背負う覚悟でやらなければならない。
- ・計画を立てる際は、リスクについても考えておかなければならない。
- ・震災後子どもたちに多くのお金が集まって助かった。日本人の助け合う力がすごかった。
- ・水、電気、ガスが使用できなかつたのが辛く、水道が使えたときが一番嬉しかった。
- ・電気のブレーカーをおとし、火事を防ぐこと。
- ・ガソリンがないのに困った。半分になると入れておく方がよい。親族が沿岸部にいるが、行きたいけど、行けない状況にあった。
- ・震災により、親をなくした子どもたちの多くは、祖父母のもとで暮らすことが多かった。しかし、祖父母も高齢化することで今後、震災孤児が増えるのではないか。

震災後の大変な中でも、外で遊ぶことが制約されている子どもたちに外で遊んでもらえるような取り組みを考え実施することで、安全に遊べる場所の提供や精神的なストレスの解消にもつながるのだと感じた。大変なときだからこそ助け合う力が必要である。

その日は、石巻市のサンプラザホテルに仙台白百合女子大学の学生と宿泊した。石巻市のサンプラザホテルは地域の方たちが災害時、避難所としても利用した場所で、海からも少し離れた場所であった。

その夜に、2つの部屋に分かれて、総合保育学科学生、人間福祉学科の学生、仙台白百合女子大学の学生各1名の2班に分かれて本日の研修のまとめと同時に、仙台白百合女子大学の学生が当時の震災時に経験した話を伝えてもらいまとめて発表する時間を設けた。

仙台白百合女子大学の学生から被災した際の出来事を聞きまとめたものは、以下のとおりである。

- ・地震が来たときは、体育館で部活をしていた。揺れ方は、最初は下から押し上げられるようなドンッとする揺れが来た後に、立ってはいられず、床にはいつくばることしかできない揺れがきた。例えると、自分が紙の上に立っていて、誰かがその紙を横や縦などにゆらしているような状態だということです。体育館が潰れると思い、床にはいつくばりながらドアの方に向かっていき、みんなを助けようと思い、ドアを開けようとしたときに友達に手を引っ張り戻された瞬間にドアのところにガラスがおちてきた。その友達のおかげで死なずに今いきている。
- ・校庭に出て校舎を見るとすごく横に揺れていた。そしてガラスが飛んでいるのが見えたけど、まともに飛べていなくてらせん状に飛んでいた。
- ・家に帰り家族に会いましたが、母親とは三日後に会えた。
- ・肝心なときには、電気が使えない。
- ・食べ物レンジで温めて食べるものが多く、電気が止まっていたため食べるができなかった。

- ・卒業式が行なわれず、卒業証書が郵送で送られてきて、悲しかった。
- ・電気が通っていないため、自分のいる場所の情報が入ってこず、津波に関しては現状を知らなかった。

その当時の体験談を直接聞く貴重な体験となった。このような内容は同じ時間を共有し対面での質疑がなければなかなか、話してもらえなかったと思われる。些細な事柄に見える内容でも、私たちは真摯に受けとめなければならぬと実感した。

2日目（8月30日）

石巻プラザホテル→大川小学校→石巻市役所復興まちづくり情報交流館・雄勝館（宮城県石巻市雄勝町上雄勝2丁目36）→社会福祉法人旭壽会 特別養護老人ホーム雄心苑（宮城県石巻市雄勝町小島和田123）→石巻プラザホテル宿泊

大川小学校では、震災後の姿のままが残されており、それを見て学生は津波の恐ろしさを感じ予想しなかったことが起こることを知る機会となった。

2日目に研修したのは、宮城県石巻市雄勝町である。リアス式海岸に面した美しい町は、建物の8割の壊滅的な被害を受けた場所であり、人口も震災前より7割減し、1,000人以下となり、過疎化の進んだ町である。

まず、社会福祉法人旭壽会 特別養護老人ホーム雄心苑を訪問した。この日の天候が、台風10号が発生しており、大雨と強風の中での行動であった。施設の方も、川が氾濫するおそれがあるため、川が氾濫すると帰宅できない職員がいるとのことで対応に追われており、忙しくされているところであった。まさに防災対策をされている施設の状況を現場で見た。そのような中、震災当時の話を原律子施設長に語っていただいた内容の一部は、以下のとおりである。

- ・マニュアルにはない想定外のことが起きる。
- ・施設は高台に位置し、津波の被害は受けなかったため、地域の津波から逃げてきた50名の人々が施設にやってきた。市からの避難場所になっているわけではなかった。住民の中からリーダーを決め、自主運営してもらうことにした。施設で備蓄していた職員・利用者の食べ物や飲み物を分けあって、避難生活した。
- ・見ず知らずの水に濡れた高齢者の方を施設の前においていく方もいた。
- ・施設のある雄勝が壊滅的という報道がされており、自衛隊のヘリコプターに気づいてもらうためにシートでSOSとし、救助を求めた。
- ・デイサービスの職員が一日2回、体操やりんごの歌を歌ったり、レクリエーションをしてくれた。
- ・施設の介護職員は家族や家がどうなっているのか心配だったと思うが、一人も「家に帰りたい」という人はいなかった。
- ・施設職員が知恵を出しあって、考えていく「介護力」が施設にいる方の助けになった。

ここでは施設長から、介護福祉士が高齢者の支えになるために取り組まれたことは、マニュアル

に書いていない心のケアや、一人ひとりの専門職のプロとしての人との関わりから、自分たちが災害時に行動すべき心構えについて学ぶことができた。

石巻市役所復興まちづくり情報交流館・雄勝館は、トレーラーハウスを利用した地域の方たちが交流できる場所になっていた。畑山泰賢さんより、研修の内容の一部は以下のとおりである。

- ・津波により、町全体が流れてしまったこの地では、復興事業の進捗状況が雄勝の地域の方たちのためであると聞き、交流や今の復興状況を地域の方々に理解してもらうことが必要であるということを教えていた。さらに、地域の情報、震災の情報を震災前、震災後のパネルや映像、データでも紹介していただいた。
- ・津波から逃れて山に逃げても、低体温で亡くなる方もいた。ライターや火をつけるものを持っていることで、命をつなぐことがある。
- ・水は役所に備蓄してあり、みんなに配布し飲用した。しかし、配布時にリュックサック等の袋がなく、運ぶのに苦労した。
- ・以前から町の方は津波が来れば、位牌を持って山に逃げるのは教訓としてあった。
- ・沿岸部の方は津波が来たら逃げる習慣は身につけていたが、ここまで来ないであろうという海から離れた場所の方に、人的被害が多かったことを知った。
- ・自分がどう生き延びるかを考えておいた方がよい。

災害時に、備えてないことで困った出来事から、必要な防災グッズや自分の住んでいる場所への理解、日頃からの教訓が命をつなぐことになることを身近に感じることができた。

3日目（8月31日）

石巻市内日和山公園被災沿岸一望→13：00学校法人 石輝学園 矢本はなぶさ幼稚園（宮城県東松島市赤井川前二215）→17：55仙台空港出発→伊丹空港着19：15到着

日和山公園からの風景を見に行くと、そこは石巻が一望できる高台にあり、震災前の写真がそこにはあった。比べてみると建物がなく、平地になっている場所や、工事が進んでいる場面を見ることで復興の現状を感じることができる場所であった。震災時には、多くの市民が高台に位置する日和山公園に避難した地を訪れ、あらためて津波の恐怖を感じ、被災地の復興を願った。

石輝学園 矢本はなぶさ幼稚園での研修は山田元郎園長先生と佐々木みゆき教頭先生が、パワーポイントと写真で当時のことを振り返って伝えていた内容の一部は以下のとおりであった。

- ・5年間その当時の話をしてこなかった。それは、家族をなくした先生方への配慮でもあった。現在も苦しんでいる方たちがいて、園児も被災者であるが、先生方も被災者である。
- ・震災後、嘔吐が止まらなくなる子もいた、心のケアが必要である。
- ・日頃使用している道具が防災グッズにもなる。散歩で使用している誘導ロープで園児たちと一緒に避難した。

・想定しておくことが大切で次世代に語り継ぐことが必要である。備えと心の準備が必要になってくる。

被災地研修の2泊3日を終え、学生防災リーダーである総合保育学科学生2名・人間福祉学科学生2名の学生とともに、研修のまとめの時間を設け、発表準備を行なった。その際は、どのような方法で、発表するのがよいか学生と話し合い、伝えていく内容のまとめを行なった。

発表内容は、以下のようなことを目指す方向性とした。

- ①震災当時の記憶が大阪の人たちには風化しているのではないかとの学生の声で、「東日本大震災記録DVD巨大津波の脅威いつどこでまた 宮城・石巻地方沿岸部 3.11」³⁾も数分視聴してもらうことにした。
- ②聞いている人たちの防災意識を確認する問いかけをする。
- ③福祉施設、幼稚園、復興まちづくり交流館等の方が体験した被災時の様子や想定外の出来事が伝わるようにパワーポイントにて作成する。
- ④写真をできるだけ使用し、視覚に訴えるように、復興まちづくり情報交流館雄勝館で見せていただいた「大津波襲来・東日本大震災 ふるさと石巻の記憶 空撮 3.11 その前・その後」⁴⁾も参考資料とし使用した。

学生防災リーダーの発表は、防災の視点を重視し、体験からどのように気持ちの変化があったのかがわかるような30分程度（DVDを含む）の発表内容を考えた。その後は、発表練習も行ない、9月から4回の発表を実施した。発表場所によって、発表時間に差が生じたため、教員と発表先、学生と教員で発表のための調整に苦労はあるが、初年度の土台づくりであるため時間をかけて、調整や学生指導は行なうようにした。発表後も、次回へのパワーポイントの変更点やもう少し、こうすれば伝わりやすいなどは、その都度、学生と話し合い調整することにしていった。

今回、被災地研修で学んだ防災の視点を、大阪の人々に伝えていく取り組みについて実施した内容は下記のとおりである。

月	日	実施内容
9月	中旬 21日	被災地研修を踏まえて、3日間の活動内容を再生し記録化した。交流の具体的議事録と取材内容の明文化、および撮影写真を整理し、作業を実施した。発表方法についても検討し、練習をする。 大阪市東住吉区社会福祉協議会 企業、NPO “異次元交流ライブ”「学生のボランティア活動について」を発表した。聴衆約50名
10月	下旬	「大阪ほっとコミ」17号の編集作業を実施した。 テーマ「大阪の防災」「東北からのメッセージ」

11月	上旬	「大阪ほっとコミ」17号の編集作業を実施した。 テーマ「大阪の防災」「東北からのメッセージ」
12月	23日	東住吉区民センター「冬休み企画・ミュージカルがやってくる」にて「被災地の現状と課題」を発表した。聴衆約150名
1月	15日	クレオ大阪中央「地域福祉セミナー、ハッピー・サンデー」にて「学生防災リーダー現地報告」を発表した。聴衆約100名
2月	下旬	本学のFD研修会の内容と発表練習を実施した。
3月	6日 中旬	学生防災リーダー4名と教員による、FD研修会にて最終総括「被災地からのメッセージ」を発表した。聴衆約30名 次年度に向けての被災地研修プログラムの立案と計画を立てた。

本プログラムで被災地研修をし、地域の人たちに伝えていく学生防災リーダーを経験し、学生自身は何を学び、感じたのかを聞いて見ることにした。実際に見て感じることで、災害の恐怖や風化してはいけない理由、ニュースや報道では知らなかった現状、被災地の人たちが今何を伝えたいのか等を身近に感じるよい機会になったと考える。下記はその実際の感想である。

1年間、学生防災リーダーを経験しての感想

- ・ 私たちにはあまり関係のないと思っていた震災関係の話も、こういう活動に参加したことで、どれだけの被害にあったことなどを見て実感する機会ができ、それを皆さんに、伝えていくことの大切さに気づきました。
- ・ 津波の恐ろしさをあらためて感じました。津波がきたらまずは高台に避難することが大切だと思いました。マッチやライターなどの暖をとるために火がつくものを持っていないと、津波から逃れても、低体温で命をおとすこともあることを知りました。
- ・ 実際に現地に行く前はニュースで見ていることばかりであれから時間も経っているので、町並みとか綺麗になっているだろうと思っていたけれど、実際に現地に行くとまだ、復興していないところもあり、震災から5年も経った今も、復興していない場所があるのに驚きました。
- ・ もっと備えておけばということがあり、今、経験された出来事を語り継ぐことが大切で命をつなぐことになる。今回、被災地から、経験された方の言葉や思いは心に響く悲しい出来事であったが、そのメッセージを伝えていくことが私たちのできる防災への活動であるのだと被災地の方たちから学ぶことができた。

学生は、被災地の方たちの思いを直接聞いて、悲しさや辛さから復興へ向かっている被災地の現状を実際に目で見て感じることで、被災地から防災の必要性について学びを体感した。

地域の人たちに発表する際も、初めのうちは、緊張して発表して、読むだけになっていたことが、観客の人の目を見て伝えることができるようになったといっており、学生自身の成長も感じる事ができた。

4章 課題

この初期プログラムを実施して、現地の研修先に大きな依存をする結果となった。現地の福祉施設や幼稚園・保育園等で働いている対人援助職への聞き取り調査と現地の学生の経験や導きのある初年度であった。現地の研修先の受け入れ体制があったからこそ、被災地から学ぶリスクマネジメントの重要性を重く受け取ることが学生の学びにもつながった。

実施計画のプログラムにはいっていたが、実際には発表することはできなかった場所、対人援助職で働いている人たちにも、発表を聴衆してもらえる場所づくりについては今後の改善していくべきところである。

東日本大震災から5年が経過した、宮城県の仙台石巻市の「東日本大震災からの復興では、再生期（平成26年～平成29年）で震災に見舞われる以前の活力を回復し、地域の価値を高める」⁵⁾とある。震災から5年経過した今だからこそ、今回のプログラムが実現できたと考える。今回、訪れた宮城県仙台市や石巻市の方たちがいっていたのは、伝えていくことの重要性がキーワードで同じ思いのもとプログラムを進めていくことができた。

5年が経過した現在でも、心の傷が癒えることがない人や語ることが難しい方もたくさんいる中、現地の方々は風化しないように、防災の向上のために当時のことを語られた。辛かった思いをよみがえらせてしまうようにも感じた。しかし、災害時の記録を伝えて防災につながるという思いで、被災地の方たちは被災した当時の出来事を教えていただけたことに感謝している。

災害は予期できないことではあるが、被災地から震災当時の生の声を聞き、防災意識を持つということだけでも、今回の取り組みによる大きな成果であったと考える。

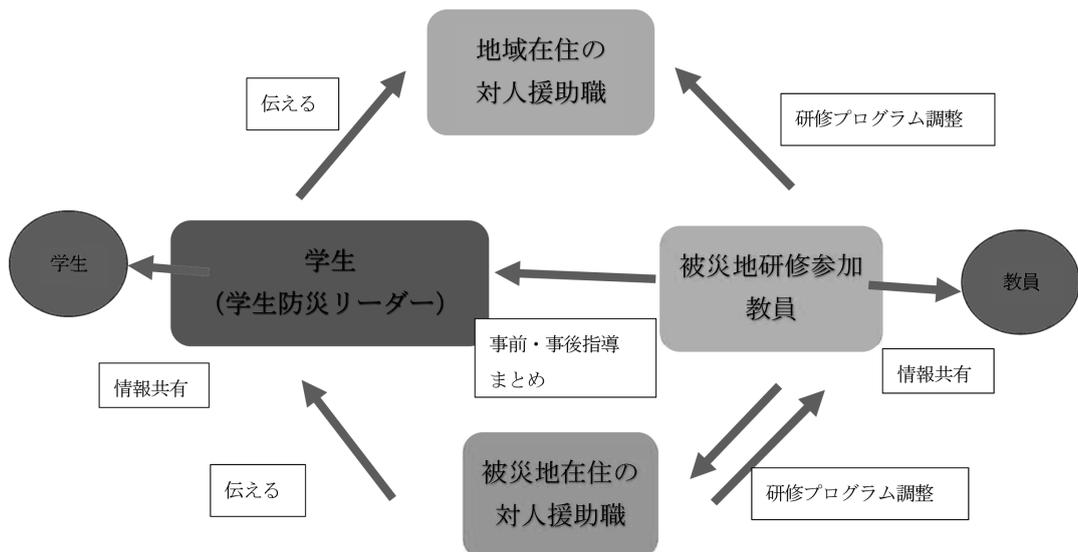


図 伝えるプログラムの体制づくり

どのように伝えていくのかをこの図では、説明することにする。被災地参加教員は被災地在住の対人援助職と研修プログラムの調整を行ない、学生防災リーダーに伝える。地域在住の対人援助職へは、被災地からのプログラム内容を理解してから学生防災リーダーが伝える体制をつくり、そこから防災への視点が広がるように、被災地研修参加教員から教員へ、学生防災リーダーから学生へ情報を共有できるような体制とする。

本学のある地域の総合防災訓練東住吉区（湯里小学校）にも筆者が参加をし、地域の避難所についても理解し、地域の方たちとのコミュニティの構築も大切であることに気づいた。そこで、地域の防災訓練に参加し、地域の方たちの取り組みを知った上で、ともに防災を考えられる取り組みについてともに考えていく必要があると認識を深めた。日中にもしも、災害が起こった際は、地域の災害弱者になる人々や援助を必要とする人がいることを教員間でも理解しておく必要がある。そこには、今回の立案したプログラムを教員が被災地在住の対人援助職の人たちと調整し、地域の在住の対人援助職へとつなげて研修プログラムの理解を得ることが重要なポイントであると考えている。

心のどこかで大阪の地で災害に遭わないと思っている人は多いのに学生防災リーダーが発表した問いかけからあらためて気づかされることが多い。それには、防災の知識や経験がないからだといえる。今回、本プログラムの伝えるということで、防災の視点やリスクマネジメントについて考えることができるきっかけをつくることができた。特別養護老人ホームの雄心苑のように、災害時に地域の方たちが避難してくることも想定しておくことも必要であると同時に、地域の方たちとの日頃からの接点をつくることで、何か災害の起こった際は、助け合えるシステムづくりも今後の課題のひとつでもあり、地域貢献・ボランティアであり、大学こそができる教育であると考えている。

今回は、学生防災リーダーにより地域の人々に発表をし、伝えることを行なったが、一緒に学んでいる同級生にも伝えることで、防災の視点を専門職の担い手になった際に活かせるような方法や、本学を卒業した卒業生に専門職の視点から被災地研修に同行してもらうことで、学生への専門職の防災の考え方を一緒に考えて学んでいけるプログラムについても考えていきたい。次年度は、事前情報を学生に伝え、被災地の情報や地域の復興状況も学生が主体となり、自ら防災の取り組みについて学びたい気持ちを引き出してから、被災地研修へ行く方が学びを深められたのではと反省する点である。次年度からは、学生防災リーダー1期生が被災地研修プログラムや経験談を次世代へつなげる発展性にも期待したい。

むすび

これから対人援助職を目指し、将来的に安全で快適な生活を支え、人命を守ることのできる専門職への担い手には、日頃から防災を考えることは重要になってくる。地域の防災訓練の参加や福祉施設、保育園や幼稚園等の防災に取り組んでいる内容を知ることが、備えることや対策や減災につ

ながるといことが被災地研修を実施し、地域の人々に伝えていく中であらためて考えさせられた点である。リスクが起こったときこそ、どうするのかを周囲の人たちで共有し、考えていくことで防災の意識は向上する。何かが、起こった際に知恵を出しあい、その場を乗り切るチームワークの大切さや自分の住んでいる場所はどのような地域にあるのかを知っておくことの重要性にも、被災地の方たちからのメッセージで気づくことができた。そのときに、災害弱者の力になれるのは、若くて社会に出て対人援助職に就く担い手で、防災の視点を持ち、リスクマネジメントを考えられる専門職の人材の育成が望まれる。本プログラムによって、防災への視点を日頃から考えることができる学校での防災への取り組みやカリキュラムを考え直したり、学生が主体的に学べることのできる防災教育が求められている。被災地からの学びを伝えることで、ボランティア教育の可能性や地域福祉を支えるヒントがいくつか見えてきたので、今後さらに課題を検討し、プログラムの改善を図りたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、仙台天使園 園長佐野督郎氏、矢本はなぶさ幼稚園 園長山田元郎氏・教頭佐々木みゆき氏、特別養護老人ホーム雄心苑 施設長原律子氏、石巻市役所復興まちづくり情報交流館・雄勝館 畑山泰賢氏の方々をはじめ、多くの方にお世話になった。また、現地でご指導いただいた佐々木貴弘先生にも感謝申し上げたい。

初年度のプログラム作成にあたっては、本学の油井宏隆教授にも協力いただいた。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 介護福祉士の養成カリキュラム等について.
<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/0000142797.pdf> (2017-11-30)
- 2) 大阪市ボランティア・市民活動センター. 平成28年度大阪市ボランティア活動振興基金. ボランティア活動促進事業助成募集要領.
<http://www.osakacity-vnet.or.jp/pdf/27/H28sokusin.pdf> (2017-11-30)
- 3) 三陸河北新報社. 巨大津波の脅威いつどこでまた：宮城・石巻地方沿岸部3.11. (DVD). ビデオプラザ 神奈川, [2012].
- 4) ふるさと石巻の記憶：大津波襲来・東日本大震災：空撮3.11その前・その後. 三陸河北新報社, 2011.12
- 5) 石巻市. 東日本大震災からの復興：最大の被災都市から世界の復興モデル都市 石巻 を目指して.
http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10181000/8235/99.hukkoujyoukyou_2.pdf (2017-11-30)

(ながはし さちえ：講師)